

現場のプロに聞く (モノレール索道の巻)



(有) 齋藤林業
齋藤 弘一 氏

プロフィール

昭和22年5月16日 栗駒町中野生まれ
家業が木挽という環境であり、小さい頃
から材業との関わりが深く、馬の時代
から木材の集材運搬をやられていたそう
です。

昭和50年頃、はじめてボーリング機械
運搬のための索道仮設の仕事を担当。

早く確実な仮設には定評があり、オペレー
ターの信頼も厚い齋藤さんに仮設の極
意を教えてもらいました。

—— 索道の仮設はベテランですね。

索道の現場では、アンカーになる木
を含めて設置する位置を決めるのが大
事です。

立木が必ずあり伐採できないことが
多いので、それよりも高い位置にワイ
ヤーを張らないとだめです。

とにかくまっすぐにラインを決めて、
立木が多いときには測量もやって、
6mmのワイヤーを人力で引きます。そ
こまでやると、あとはだいたいスム
ーズにいきます。

—— モノレールも手がけられたの
は早いんですね。

モノレールは昭和56年にはじめて
張りました。水平をとる方法も判らず
試行錯誤でした。

索道よりも簡単にルートを決めるこ
とはできますが、立木よりもむしろ露
岩が障害になります。レールは4.5m
の長さが標準です。これを3本の支柱
で支えます。平均して60m/日、最大
で100~150m/日、最低でも20m/日

のスピードで張ります。1チーム
3~4人が基本です。運搬する時に荷
が傾くことがないレールの張り方が
重要であり、安全上からも必要です。

早く確実に仮設するためには、手直し
を極力少なくすることがポイントになり
ます。撤去も考えると支柱は出きるだけ浅
くして(従って抜きやすくなる)、充分
な支持力があるようにセットするのが理
想です。地盤の傾斜も考えたこの加減が
なかなか判らないものです。特に竹藪で
は根のところを抜いてしまうと、どこま
でも止まらずにやっかいなものです。

こういった知識も何度も失敗を重ねて
判るようになりました。

道具—工夫した支柱(鳥居とよんで
いる)等—も改良し、早く安定した仮
設を目指して研究しているつもりです。

また、撤去して戻ってからも機械資
材類を保管する前に整備するのも大切
です。具体的には給油、レールの曲り
や水平の修正などで、必要になったと
きにすぐに使える状態にしておくこと
もポイントになります。

—— むずかしい現場はありましたか。

16mほどの溪流を無支柱で渡らなければならなかったときは、皆で知恵を絞りました。結局、以前に索道で使ったA型の円柱（4m程の鉄管）を補強してつぎ足し、橋の材料（本体）に仕立てて、モノレールを渡しました。

—— 困ることはありますか。

レールは曲げるとダメになっていきます。まっすぐなルートは脱輪がなく安全でもあります。ルートを決めるときにポイントがしっかり出ていないと曲げなければならなくなったりします。「斎藤さんのモノレールはムクレンイから（ダメにならないから）」といって積載オーバーをされることもあります。レールもいたみます。過積載は大丈夫だと思っても色々と問題があります。

—— 気をつけていることは。

10,000m近いレールをはじめとする道具の手入れを欠かさないと、現場では必ず記録（メモ）をとることなどです。

—— 現場管理者にひとこと。

地権者・発注者としっかり連絡をとって下さい。借地であれば、借りる条件、立木等についてはその処理（どの程度まで伐採が可能か？）を予察の段階から明確にしておいて欲しいです。そうでないと張りかえやひどい時には「すぐ出ていけ」というようなことになってしまうことがあります。

早くやるには大人数で急いでやればよいとは素人考えで、それなりの技と周到な準備、計画が大事であることを教えていただきました。ボーリングの現場を影で支える斎藤さんのようなプロの力に今後も期待したいと思います。（平成14年4月栗駒町のご自宅にて、広報委員によるインタビュー）

